

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

建築物・装飾・歴史からみる国境地域の多元的文化：
—雲南省騰衝県和順郷の事例研究に基づいて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001564

建築物・装飾・歴史からみる国境地域の多元的文化 ——雲南省騰衝県和順郷の事例研究に基づいて

韓 敏

国立民族学博物館

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 はじめに | 3.1 華僑の故郷のシンボル——和順図書館 |
| 1.1 文化的に栄えた華僑の故郷——和順郷 | 3.2 壇廟からみる重層的信仰と現世への執着 |
| 1.2 雲南国境地域の住宅建築と公共建築 | 3.3 祖廟とその歴史 |
| 2 住宅からみる建築様式・宇宙観・象徴 | 3.3.1 一番古い寸氏宗祠と威厳に満ちる李氏宗祠 |
| 2.1 多民族文化の象徴——雲南漢族の複合住宅 | 3.3.2 張氏宗祠と科擧の栄光の証しである「華表」 |
| 2.2 建築物にみる人間・自然・神々の秩序 | 3.3.3 劉氏宗祠と劉氏宗族の祖先祭祀の変化 |
| 2.2.1 儒教的「礼」の精神の具現 | 4 おわりに——まとめと展望 |
| 2.2.2 宗教儀礼の場としての居住空間 | |
| 3 公共建築からみる和順郷の歴史と多元的文化 | |

1 はじめに

本論文は雲南国境地域の騰衝県、主として漢族の居住地域である和順郷での現地調査と文献調査に基づいて、民居、壇廟、祖廟と図書館などの建造物に見られる建築様式・装飾に焦点を当てて、物質文化に見られる社会的・宗教的機能と文化的象徴を分析することによって、国境にある漢族地域に見られる中国とミャンマー、もしくは、ミャンマーが仲介した西洋との出会い、漢族と他の民族との出会いの中で作り上げられてきた多元的文化の実態を明らかにしようとする。

筆者は2000年7月29日から8月7日まで、2001年11月25日から12月9日まで、二回にわたって、雲南省騰衝県和順郷で国境地域の漢族文化の動態について現地調査を行った。

1.1 文化的に栄えた華僑の故郷——和順郷

雲南省騰衝県和順郷は、地政学的に三つの特徴がある。まず、ミャンマーに接している国境地域である。省都の昆明から750キロ、ミャンマーから70キロ離れた国境地域である。和順郷は騰衝県城まではわずか4キロの距離である。二つ目の特徴は昔から東南アジアを結ぶ交易上・軍事上の要衝であるという点である。紀元前4世紀の漢代に、北の四川省成都から始まり、南のインドに至るまでの「蜀身毒道」という道は雲南の騰衝

を経て、ミャンマー、インド、パキスタン、イラン、アフガニスタンにつながっていた。このように雲南から東南アジアに出る要衝であるため、秦漢時代からすでに商業貿易の重鎮として知られるようになった。騰衝は『史記・大宛列伝』の中で、「乘象国」または「滇越」という地名で記録され、唐代から「騰越」「騰衝」に改名された。現在、和順郷の入り口に明朝の嘉靖初年（1522年）に立てられた石碑¹がまだ残っている。これは官僚のポストを辞したあと、故郷の治水工事を行い、耕地を開拓した寸玉という和順郷出身の人を表彰するための記念碑である。その石碑の上には「騰越州陽温登郷創興水利述」といった文字が刻まれ、ここでは現在の騰衝のことを「騰越州」また和順郷のことは、「陽温登郷」として記述されている（騰衝県志編纂委員会 1995:19）。そして清朝の康熙 41 年（1702 年）から現在の「和順郷」に改名された。

和順郷の三番目の特徴は古くから多民族が雑居してきた地域であるという点である。考古資料によると、今から 4000 年前の新石器末期に、人がここに住んでいた形跡があり、モン・クメール語系の人々が明代までにここに住んでいた（尹、李等 1999 : 27）。

和順郷は 2001 年の時点では水碓、十字路、大庄の三つの行政村によって構成され、1,518 世帯 6,048 の人口を有している。和順郷の人口の 94% は漢族で、残りはタイ族、回、リス、ワ、アチャン、白族によって構成されている。族譜、墓地の石碑と地方誌の記録によると、ここの漢族のほとんどが、明初期以降、朝廷の辺境政策に応じて四川、湖南、南京などから駐屯した人々の子孫である。たとえば、寸氏、劉氏、李氏、尹氏と賈氏の祖先はそのとき軍隊とともに四川省巴県からやってきた人たちである。

和順郷は周囲の山々に囲まれ、真ん中には半月形の平地が広がっている。大盈江という河が和順郷の東北から西南の方へ流れ、人々の日常生活と農業生産に十分な水源を提供している。和順郷を含めた騰衝は、山地が多く、河と平地は総面積の 16% しかない。雲南からミャンマーやインドに出る通路となっている立地条件と人口圧は、明清以来の出稼ぎの要因となった。東南アジアでの採鉱や穀物の売買は、和順郷の華僑に富と栄光をもたらした。現在、海外にいる和順郷出身の華僑は一人あまりで、ミャンマー、タイ、日本、アメリカの 13 ヶ国と地域に分布している。和順郷在住の外国から帰ってきた華僑は 70 世帯、202 人、彼らの親族である僑眷²は 316 世帯、2,692 人、香港・澳門と台湾から帰ってきた人を含めて、あわせて、419 世帯 3,052 人にのぼり、和順郷の全人口の 62.7% を占めている。そのため、和順郷は華僑の故郷と呼ばれている。

長い歴史の中で人口が流動し、多民族が雑居してきた結果、国境地域の独特の多元的文化が作り上げられた。和順郷の多元的文化を媒介し、象徴的に表しているのは彼らの奥まった広大な邸宅建築群である。これから住宅建築と公共建築の二つの側面から、建築様式、装飾のシンボル及び建築に表わされている人間社会の秩序や宇宙観を検討していくことにする。

1.2 雲南国境地域の住宅建築と公共建築

和順郷の古い民居は現在千棟近くあり、清朝の乾隆、嘉慶、道光、咸豊、同治、光緒のいくつかの時代を経て、民国初期までの数百年のあいだに建てられた膨大な民居建築群である。和順郷の民居の基本パターンは「三坊一照壁」、「四合院」と「四合五天井」と呼ばれる建築様式であり、しかもいずれ二階建てのものである。「三坊一照壁」は中庭を中心とした閉鎖型の三合院のことである。三間続きは一坊、すなわち一棟のことである。中心の中庭、東西に長く建てられた家屋の主屋、南北に長く建てられたわき部屋の二棟と白く塗られた土の壁である「照壁」が「三坊一照壁」という三合院を形成する。「照壁」と呼ばれる土壁は三合院を囲むだけでなく、昼間の太陽光線を反射して室内を涼しく、夜間は室内を温かく保つ機能もある。また、邪悪なものは直進してくるものであるという中国人的な考えがあるため、照壁はそれを防ぐ意味もある。「四合院」に関しては、北京の四合院がおそらく現在最もよく知られ、中国住宅の中で、最も基本的な形態を示しているものとされている。「四合院」は中央に庭を囲んで、主屋、両側の棟と主屋と向かい合う棟の四棟からなる。「四合五天井」は基本的に四合院のことであるが、真ん中の大きい天井以外に、四隅にもそれぞれの小さな天井がある。

本論ではこの基本パターンの細部を記述することによって、雲南の合院建築と漢族の四合院との関連性を明らかにすると同時に、スケールが大きく、装飾が贅沢という和順郷の民居の特徴について、華僑の送金、中央政府の目の届かない遠隔地という地理的側面、合同家族という家族形態の三つの側面から考える。また、住宅に表わされている人間社会の秩序と宗教儀礼の機能なども考察する。

総面積がわずか16.18平方キロメートルを有する和順郷は、千棟近くの古い民居のほか、図書館、数多くの寺院、祖廟、洗濯あずまも分布しており、和順郷の独特の人文景観を呈している。近年、和順郷はその民居と公共の建築のもつ歴史的・芸術的価値と観光資源としての重要性が認められ、政府の観光スポットとなっている。筆者は聞き取り調査と文献調査に基づき、観光スポットになるまでの公共建築の歴史を記述し、その機能を注目していきたい。

2 住宅からみる建築様式・宇宙観・象徴

人間はうまく生活していくために、選択と適応の二本足で自然と付き合ってきた。住居の立地、住居空間のデザインは自然の選択と適応の重要な要素である。和順郷の自然景観と居住空間は、自然に対する人間の選択と適応の歴史を呈している。山の多い和順郷の人々は、土地を大事にしている、平らなところを水田にして、自分たちの家屋を河に沿い、山に向かって建てている。火山石や石板で敷設された無数の路地はネットワークのようにこれらの民居を結んでいる。

自然は住居や集落の性格づけをする諸要素の一つにすぎない。ほかに住居のデザイン・集落の景観に大きな影響をあたえる要素として、価値観、社会的・文化的理念、宇宙観、宗教観などが考えられる。

上述したように和順郷の民居は「三坊一照壁」「四合五天井」「四合院」の形式をとっている。これらの建築様式は中庭を中心とした複数の棟からなり、外部に対して高い塀によって囲まれた閉鎖された複合住宅であり、建築の群体性、閉鎖性、左右対称の中庭群という建築上の共通点が見られる。上記の特徴は国境地域の和順郷だけでなく、中国の他の地域でもよく見られ、「大は都市から、宮殿、壇廟、官署、寺院、小は住宅にいたるまで、また遠くは周代の宗廟から、唐・宋時代の仏寺、近くは明・清時代の住宅にいたるまで、一貫してみとめられるものである」(田中 1985: 839)。

国境地域に位置する和順郷の「三坊一照壁」「四合五天井」「四合院」は、一体どのような仕組みがあり、中国の建築文化においてどのように位置づけられているのだろうか？

2.1 多民族文化の象徴——雲南漢族の複合住宅

アメリカの地理学者であるロナルド・ナップが四合院について、中庭住宅の四合院は、「中国建築を象徴する複合住宅である。中国建築の到達点は軸線、均衡、シンメトリーの原理をよく発達させ、それらによって代表される北部の「四合院」住宅の形態に縮図的に示される」(ナップ 1996: 25)。四合院は漢代から形成され、すでに 2000 年の歴史をもっている。また、支配階級の貴族から商人、一般の比較的裕福な庶民までの幅広い階層の人々に使用されてきた。和順郷のほとんどの民居は、その家主の民族出身と関係なく、全て「三坊一照壁」「四合五天井」「四合院」の形式をとっている。

和順郷の住宅の表門の多くは門の上に建てた高いアーチ、門楼(写真 1)がついて、縁起のよい動物、植物と果物の彫刻で精緻に飾られている。また、入り口は曲がりくねり、変化に富んでいる。表門をくぐると、過道という小さな部屋があり、このような過度的空間をつくることによって中庭内部の安静、住む人の安全性とプライバシーを確保するのである。

中庭に入ると、天井を中心に明確な縦軸と横軸がある。南北の主要な縦軸線上にあるのは中心的な空間である母屋である。中庭から母屋に入るところに階段が設けられ、高大な母屋のイメージが演出されている。階段の数は 3, 5, 7, 9 の奇数となっているが、5 段が最も多いようである。和順郷の人々はこのような 5 段階からなっている階段のことを「ウーズ・ディンカー五子登科」と呼んでいる。これは、我が家の子供たちがみんな科挙試験に合格することを意味する縁起のいいものである。

中庭の東側と西側には、母屋より比較的小さくて低い建物を配している。親夫婦は母屋の左右の部屋に住むのに対して、次の世代の人や客はこの東側と西側の棟に住む。家族の地位、経済力と人口に応じて、横、縦あるいは上に部屋を増やしていく。和順郷の

民居のほとんどは二階建てである。土地が狭く人口が密集している和順郷では、清代からすでに二階建ての住宅が使用されていた。廊下と通路が設置され、上下の部屋、部屋の内外の行き来が自由で便利である。雨の日でも、来客中でも家の者が自由に行き来できるようになっている。

中庭は石で舗装されている。程度の差があるが、和順郷のどの家も、中庭の中央付近には、鉢に植えられた数多くの草木や花が並べられている。草木や花の中では松、茉莉、蘭と菊が一番多いようである。観賞と芳香のためであると同時に、中国人の価値観も具現化している。たとえば、松は古くから特別の木、神木とされたが、のちに濁世にあっても変節しない君子の処世態度を象徴するものとなった。蘭は女性の魅力の象徴である。秋が終わり、他の花が散っていく中で「霜を拒む」菊は、長寿のシンボルである。また、蘭、梅、竹と菊は「四君子」と呼ばれ、高潔な人柄を象徴する花としてよく和順郷の民居の照壁や窓の装飾に使われる。

「三坊一照壁」の住宅の肝心な締めくくりとなるところは白い照壁と呼ばれる土壁である。厚い土壁は三合院を囲むと同時に、庭と部屋の温度を調節する機能や邪悪と思われるものを除く意味も与えられている。このような住宅敷地内に殺気除けの目的で設けられた壁は中国全土で広く見られる。ただし、地域によってその壁の呼び方が異なっている。たとえば、北京では「影壁」「影牆」、浙江省の寧波では「照牆」、温州では「遮扉牆」「照屏」、福建省では「照牆」、沖縄では「ヒンプン」と呼ばれている（渡邊 2001：402-403）。このような殺気除けのために壁をつくる慣習は漢族だけではなく、チベット族、土族のあいだでも流行っている（葉、烏 1990：462）。

和順郷の照壁（写真2）には福、寿、卍、喜、松、鶴、鹿などの文字、山水画と詩がよく書かれている。さまざまな図案の中で、最も多いのは福という文字であり、幸運、幸福、祝福などを意味する福はすでに紋章化されている。照壁の造形は簡潔、且つ優美である。こうして、中庭の草木や花を植え、照壁に文字や絵を飾ることによって、閉鎖な庭の空間を、生き生きとした、奥ゆかしい感じと風雅な興味が溢れる空間に変身させている。こうすることによって、家を出なくても、自然を楽しむことができ、精神的な満足感が得られる。

高い塼で囲った閉鎖型の外観が和順郷の民居のもう一つ重要な特徴である。清末民初に建てられた民居の塼は一般的に6メートル以上の高さがある。このような高くて頑丈な塼は貧富の如何にかかわらず和順郷の共通の特色となっている。国境地域の山岳地帯では、山賊や地域間の異民族同士の争いに対する防御の必要性から生れてきたのであろう。

上記のように、和順郷の中庭建築群体の仕組みについて記述してきたが、このような建築形式は中国の住宅建築史においてどのように位置づけられているのだろうか？

学者のあいだでは「三坊一照壁」「四合院」「四合五天井」は白族の伝統的建築様式で

あるという説があった(李, 陳, 王 2000: 7; 横山 2001: 368)。また昆明市内にあるテーマパークの「民族村」では上記の「三坊一照壁」「四合院」「四合五天井」の建築様式が白族の建築の特徴として紹介されている。

一方, 雲南出身の建築学者である楊大禹氏は「三坊一照壁」「四合院」「四合五天井」が雲南, 特に大理と麗江に見られる独特の漢族式の複合住宅であると主張している。「雲南の建築文化は中原文化と同じ源を持っている。南詔の大理国時代から, 中原地域との交流が盛んになり, 漢族移民が大量に入ってきた。それに伴って, 中原の建築文化も雲南で伝播するようになった。初期の建築の木造体系が中原地域のものとはあまり違っていなかったが, 清代に入ってから, 雲南の漢族式の建築はもう中原の建築パターンを真似するのをやめて, 徐々に自分達の個性を形成してきた」(楊 1997: 62-66)。すなわち, 「三坊一照壁」や「四合五天井」は長い歴史のなかで, 礼を重んじる漢族文化を吸収し, 再創造して, 自民族の美意識を取り入れた複合的なものであり, 純粋な雲南土着の住居でもなく純粋な中原地域の漢族様式でもない, 雲南生れの独特の漢族式の複合住居である。

白族における漢族文化の摂取について, 白族の研究者である横山廣子氏が次のように指摘した。唐の時代に, 西のチベット勢力, 吐蕃と唐朝とのあいだに, 南詔という部族連合的性格の王国が誕生し, その都が大理自治州の中心である大理盆地に定められた。現在, 白族と呼ばれる集団の核は, 南詔から大理までの時代に徐々に形成され, 南詔王の周辺の高官・貴族層や大理国の統治者を始めとして, 中国西南部勢力の支配層の系統を引く人々である。南詔以来, 白族の先人であった人々は, 雲南の諸集団の中ではぬきんで漢族文化を摂取し, 他をリードする存在であった(横山 2001: 354-355)。

和順郷の歴史と建築様式は上述の楊氏と横山氏の論点を支持している。まず, 歴史的にみて, 和順郷を含めた騰衝県全体は白族の先人が建立した南詔王朝と大理国の一部であったため, 白族の漢族式の「三坊一照壁」と「四合五天井」を住宅様式に取り入れたことが十分考えられる。

和順郷の民居の建設は白族の大工たちがかかわらないものがないと和順郷の人々は言っている。それについて, 筆者が和順郷在住の85歳の白族出身の大工, 劉錦錫(写真3)にインタビューした。1915年生まれの際は14才の時に兄たちと一緒に大工と彫刻で有名な大理白族自治州の劍川からやってきた。和順郷についた時, 漢族の言葉がまだあまりできなかった。見習大工として, 同じ白族出身の師匠について多くの家や洗濯あずまやを建造してきた。1942年日本軍が騰衝を占領するまで, 騰衝県には劍川出身の大工が800人あまり, 和順郷だけでも200人以上の大工が住んでいた。ところが, 騰衝が陥没した後, 多くの大工が劍川に戻っていったが, 劉氏は残った。現在, 漢族の女性と結婚している。85歳の今でも, 和順郷の人々のために, 母屋の家堂(写真4), 楽器, 窓などをつくっている。

上記の諸現象から和順郷の「三坊一照壁」「四合院」「四合五天井」の建築スタイルは,

白族が漢文化を吸収したあと独自に形成した雲南の漢族式複合住宅であり、のちに白族の大工の活躍とともに漢族などの他の民族のあいだに広まったものであると言える。

中国の三つの直轄市、13の省でフィールドワークの調査を行ったり、旅行したりした経験のある筆者にとっては、和順郷の住宅の贅沢さと豪華さが顕著な特徴である。それは部屋の数と母屋・門楼・回廊・中庭などのいたるところの装飾に表れている。

海外華僑の送金が豪邸を形成した原因の一つである。そのほかに中央政府のコントロールの弱い遠隔地という地理上の原因もあるように思われる。清朝の時代（1644-1911年）、贅沢禁止令が出され、一般人の住まいは3間、公的建造物は7間、寺院は9間、宮殿は11間をこえてはならないと規定された（ナップ1996：35）。ところが、清末民初に建てられた和順郷の民居の場合、一つの家族の屋敷は、複数の二階だての三合院と四合院によって構成され、その部屋の数は20も超えている。わずか16.18平方キロメートルの和順郷では数多くの豪邸が密集しており、これは他のところではあまり見かけられない現象である。中央政府の目の届かない遠隔地においては、この贅沢なスタイルを住宅に用いることができたのであろう。

また、昔から男たちが外国に出稼ぎに出るということもあって、結婚した兄弟たちになるべく家から出ていかないで、合同家族を成して高い塀の中で一緒に暮らし、嫁と姑、嫁同士が互いに助け合い、男不在の家庭を支えていた。複数のカップルの夫婦が同じ敷地内に同居するというのは安全、防御と相互扶助という考えに基づいたものであり、また、複数の三合院と四合院によって構成された複合住宅もその考えのもとにデザインされたのであろう。

2.2 建築物にみる人間・自然・神々の秩序

「家」は、中国の言葉では、住まいと家族の両方の意味をもっている。住まいとしての家の建設とその形式は、そこに住む人の家族関係に規定されており、一族の結束、願望と社会的ステータスを象徴すると同時に、住む人の宇宙観や信仰の形態を具現化するのである。

2.2.1 儒教的「礼」の精神の具現

儒教的礼の精神は現世を重んじ、積極的な出世態度をとり、理性を日常生活、倫理感情と政治観念に取り入れることを強調する。また、礼は上下の倫理と尊卑の等級を用いて、親疎、貴賤、長幼の人間秩序を作り上げている。この礼の精神が和順郷の住宅様式によく投影されている。

まず、中央の母屋を見てみる。母屋は接客という社交的、世俗的な場であり、またいろいろの儀礼を行う神聖な場所でもある。そこで階層的な社会秩序が厳しく守られ、価値観や宗教観が正確に表わされている。和順郷では、どの家も永続性のシンボルとして、

母屋には背の高い祭壇が置かれており、その上に「天地君親師」、「竈の神」と「一族の歴代先祖」の位牌が奉られている。この三つの位牌とこれらの置かれている祭壇を「家堂」と呼ぶ。「天地君親師」の位牌はまた、「天地牌」とも呼ばれ、祭壇の真ん中に奉られている。「天地君親師」はそれぞれ天、地、君主、親と学校の先生を表す。1911年民国が誕生してから、真ん中の「君」が「国」に変わったという。その右にあるのは、一家の運命を司る竈神の位牌である。竈神は一家の調和を守るものとして奉られている。その左にあるのは父系一族の歴代先祖の位牌である。文化大革命のあいだに、「天地君親師」、「竈の神」、「先祖」の位牌を奉ることが禁止されたため、和順郷の人々はその位牌を祭壇から外して隠していた。位牌の代わりにこの神聖な場所には共産党政権のシンボルである毛沢東の画像がかかっていた。改革開放後に、三つの位牌が再び奉られるようになった。

また、儒教的な身分制社会の秩序は居住空間の方位、建築物の高さ及び部屋の使い方にも表されている。居住空間にみられる境界は中国の漢族に限らず、「居住空間の開きかたと閉じかたに関する原理は、居住空間のデザインがその居住のつくられる社会における人間関係を反映している」（石毛 1971：261）。和順郷の場合、たとえば、母屋に向かって右の部屋は、母屋の左の部屋より上位とされ、家族の中で一番権威のある親夫婦が右の部屋に住むことになる。その場合、長男夫婦は左の部屋に住むことになる。母屋の棟の右と左、すなわち中庭の東側と西側にもそれぞれ建物が建てられているが、その高さは母屋の棟の高さより低くしなければならない。東側と西側の棟には長男夫婦の子供か次男夫婦が客が住む場所になる。この身分制的原則はいまでも守られている。

母屋の入り口の柱、門の上と両側、母屋の中、いたるところに対になっているめでたい対聯や四文字の扁額が飾られている。これらの対聯と扁額は政界や文化界の有名人の自筆が多い。例えば、1911年辛亥革命のあとに雲南都督になった蔡錕將軍の自筆の「民国人瑞（民国という新しい時代に人々は瑞祥）」や、同じ辛亥革命の有名人である李根源³自筆の「節寿双高（節操が堅く寿命も長い）」、和順郷出身の拳人、書道家でもあった張砺の自筆の「尚義篤宗（義を尊び、一族に一意専心である）」などはその例である。有名人が自分達の一族に自筆の字句を書き記すということは中国では非常に名誉なことである。これらの対聯と扁額は内部の家族に対して、家の伝統を守るようにという教育機能があると同時に、外部に対しては、一族の社会的地位を誇示するものでもある。

結婚式や葬式を行うたびに、対句の対聯と扁額が貼り替えられる。2001年に筆者が和順郷で調査したときに出会ったある若者の結婚式のことであるが、新郎の家の玄関には「門迎上客家増喜」、「戸進新人庭溢歡」という対聯と「慶喜溢門」の扁額（写真5）が貼られていた。それらは「お祝いのお客さんを迎える我が家は喜びを一層増し、新婦を迎えている我が家の庭には歓声が溢れて、歓喜がいっぱいのわが家である」ということを意味するめでたい表現である。さらに、母屋の両側には「連心果結文明家」と「並蒂花開放致福路」の対聯と、「一堂燕喜」の扁額が飾られていた。一つの実に二つの核が入っ

ている果実が文明の家で実り、一つの蒂に二つの花が咲くハスが裕福の道に咲き、一族が大喜びであるという結婚へのお祝いの意味の言葉である。このめでたい字句は結婚を祝う一族の喜びと豊かになりたいという願望を表現している。上記の民国時代の扁額と比較すれば、時代の変化を読み取ると同時に、裕福、長寿、一族の結束と継続などは時代を超えた人々の願望であるとうかがえる。対聯の字句以外に、門楼、照壁、格子状のパネルに彫られた鶴、花、岩などの図案も長寿や子孫繁栄などのシンボルとして使用されている。とにかく、和順郷の住まいに用いられる装飾には、現世利益への執着が顕著に出ている。筆者が調査した東北、安徽省の北部、陝西の北部、湖南省などの農村部では母屋が簡素であるのに対して、和順郷の母屋（写真4）は極端に優雅、かつ華美に飾りつけられていることが印象的である。

写真6は1940年代後半に李氏一族が母屋の前で撮った集合写真である。前列の右から1番目の女の子が現在もこの屋敷に住んでいる。彼女が筆者にこう語った。「真真中に座っている老人は私の祖父、家長で、左は二番目の祖父、右は五番目の祖父だ。大家族で、子供たちのしつけが厳しかったのよ。使用人はいたが、家族の使用する水は、全部私たち子供が河から汲んできたのだ。食事のときは、成人の男達が母屋のテーブル、女達は台所のテーブルで、子供達は小さなテーブル、それぞれ違う場所で食事をしていた。教育に関しても男の子がちゃんとした学校に通っていたのに対して、女の子は学校に行かせてもらえなかった。祖父は先生を家へ呼んで、家で女の子の教育をさせた」。

現在の和順郷では、普段の食事の時は、男女、長幼の区別がなく、一家は同じテーブルで食事をするが、客を招待するときや、冠婚葬祭の宴会のときは男女と年齢による席順と方位はいまでも守られている。

こうして、住まいの中から儒教的伝統や家父長制の影響を容易にみてとることができる。その空間の配置と装飾のもつ象徴性は、観念的にも実際にも住居内における家族関係と彼等の願望を具現化している。

2.2.2 宗教儀礼の場としての居住空間

漢族の住宅は生きている人間の日常生活の場であると同時に、生きている人間と死者、人間と自然、人間と神々のコミュニケーションの場、宗教儀礼の場でもある。そのため家を建てるまえに立地と方位を慎重に考えるのである。内地の漢族と同じように、和順郷の人々も家を建てる前に、「地師」と呼ばれる風水地理の専門家を呼んで、これから建てる家の場所を判断してもらおう。依頼された「地師」は、まずお椀に米をいっぱい入れ、16元、26元、36元の人民幣を包んだ赤い紙もお椀に入れる。お椀を平らのところに置いて、そのお椀の上に羅針盤を置く。羅針盤の針が示した方位に家を建てるのである。また家の入り口の方角もこうやって決めるのである。

2.21では、母屋の祭壇には「天地君親師」、「竈の神」と「一族の歴代先祖」の三つの

位牌が奉られていると述べた。実は、どの家の祭壇も上記のものほかに観音像、蠟燭、蓮の形の飾り物が置かれている（写真4）。女性、特に、精進潔斎⁴の女性が毎日、朝晩二回欠かさずに観音像に線香をあげて、自分、あるいは家族の誰かのために祈る。「天地君親師」、「竈の神」と「一族の歴代先祖」の位牌からなる宗教的空間は集団指向で、儒教的、家父長制的、制度化されているのに対して、観音像、蠟燭、蓮の形の飾り物から構成された宗教空間は、個人的、仏教的、女性中心とした、恣意的なものである。神聖な母屋の祭壇において、女性が自分達だけの宗教的空間を獲得したのは、社会主義革命による変化なのか、それともそれ以前の慣習なのかを今後調べていく必要がある。いずれにしても同じ祭壇で二つの質の異なる宗教的空間が共存していることは興味深い現象として指摘しておきたい。

母屋は年中行事や冠婚葬祭といった儀式に欠かせない舞台でもある。結婚式の際、新郎新婦が母屋で夫婦になる儀式を行う。人が亡くなった場合、死体を埋葬するまでの三日間、棺に入れられて、母屋の真ん中に置かれる。そのあいだ、死者の親族が棺の周りで寝る。

中元節になると、旧暦7月2日から14日までに「接亡」という死者の魂の里帰りを迎える儀式を行う。7月2日の夜、家の入り口で紙銭を焼きながら死者の名前を絶えず呼ぶ。燃えた紙を持ち込むことによって、死者の魂を家に迎えたと考える。2日から14日のあいだに、母屋の正面の壁に「亡単」という死者の個人名が書かれている名簿が掛かる。その下にテーブルが用意され、毎日二回の食事が供えられる（写真7）。14日の夕方、供え物を用意してから、燃えた紙を入り口の外に出して、おかず、お茶と酒を撒きながら死者の魂を送り出す。

こうして、人間が生れてから死ぬまでの大部分の時間が家で過ごすだけでなく、死んでからも引き続き、家の中で供養され記憶され、また家族の守り神として期待されている。住宅はそこに住む人の生存と安全を保障すると同時に、家族の理念と信仰を具現化する場も提供している。

3 公共建築からみる和順郷の歴史と多元的文化

和順郷は千棟近くの古い民居のほか、図書館、五つの寺院、八つの祖廟、七つの洗濯あずまや、十数の「月台」とよばれる月見のための半円形の形をする台も6.18平方キロメートルの土地に分布している。青い山々、清らかな河、宝石のような蓮の池と水田、軒先の反り返った白い壁と灰色の瓦の民居、と起伏のある石板の路地は、絶妙なハーモニーを作り出し、人間の楽園を再現すると同時に、和順郷の歴史を表象している（写真8）。

3.1 華僑の故郷のシンボル——和順図書館

ここは清朝の嘉慶時代（1795-1820年）に天、地、水の神々を祀る三元宮という寺院が建てられたが、1928年ミャンマー在住の華僑たちの寄附で元の三元宮の場所に中国と西洋を折衷した和順図書館（写真9）が建てられた。現在、その蔵書が約7万冊にのぼる。そのうち、清代以前の線装本の古典文献は約1万冊、民国期の文献は約15万冊がある。ほかに貴重な和順郷史、東南アジア史や華僑史の資料、和順郷出身の人が書いたエッセイ、族譜などが数多く保存されている。

文化大革命のころ、和順図書館は一時に「工人宣伝隊」⁵の事務室として使われていた。そのときに、和順郷の人たちが大切な図書を保存するために図書を和順郷の中天寺に移した。そのため、和順図書館の図書は一冊も失われずに済んだ。現在、和順郷の老若男女が毎日ここに来て新聞や雑誌を読んだり、無料で本を借りたりしている。

図書館は単に本の貸し出しの場所だけではなく、20世紀初期の新文化運動の拠点でもあった。和順郷の有識者たちが図書館を拠点に1926年に『和順崇新会刊（のちに『和順郷』に改名）』を創刊した。執筆者はいずれ和順郷出身の人々であり、民国期の農村協同組合、男女平等、教育問題、和順郷の歴史などを取り上げ、地域社会および中国全体の政治・経済・社会の諸問題に積極的に取り組んでいた。『和順郷』は1999年に復刊され、和順郷の歴史、海外の和順郷同郷会の歴史、故人の伝記などが載せられている。

里帰りの華僑たちはかならず図書館によって、そこで資料を調べたり、幼いころの思い出を思い出したりする。ミャンマーから里帰り中のある60歳ぐらいの華僑が「幼いころ、毎日和順図書館に来ていた。私が和順郷に戻るたびにここに来る。ここは私にとって一番懐かしい場所だ。ミャンマーにいる他の和順郷出身の仲間もみんなこう言っている」と語ってくれた。

華僑の寄附金で建てられたこと、蔵書の量と質が中国の農村図書館の中で一位であることと、その建築様式が中国と西洋を折衷したものであることから、和順図書館は華僑の故郷のシンボルとなり、騰衝県政府の文物管理所⁶の申請によって、1993年に雲南省級の重点保護文物として承認され、1998年から観光スポットとなった。筆者が調査中に保山市昌寧県小学校の先生と生徒35人の団体客と出会った。彼らは前の日の朝8時に出発して、14時間の旅を経てやっと和順郷についた。図書館を見学した彼らは「本当にすばらしい」と絶賛した。

3.2 壇廟からみる重層的信仰と現世への執着

和順郷現存の壇廟は明代の中天寺、魁閣、清代の元龍閣と文昌宮の四つがある。

中天寺は四つの壇廟の中でもっとも古くて、明代の1635年に建てられたものとされている。山門、弥勒殿、観音殿、本殿、天門殿、玉皇殿、三皇殿、啓聖宮、朱衣閣、魁星閣などの複数の建築物によって構成されている。ここは僧侶が管理している仏教の施設

であるが、玉皇、三皇、文章の興衰を主宰する神さまの魁星、試験を司る神さまの朱衣使者のような道教の神さまをも奉っている。中天寺の主催で、毎年一回、和順郷全域の人が参加する、地域の安全と豊穡を祈る祭りの「^{ダーバオジン}打保境」が行われる。

魁閣も明代に建てられたものとされ、文章の興衰を主宰する魁星を祀るところである。

元龍閣は1762年（清代の乾隆27年）に建てられ、山門、水神の竜王殿、三宮殿、魁星殿、観音殿によって構成された建築群である。三面は山に囲まれ、一面は堤に面した元龍閣は絵より美しいという評判がある。騰衝県政府の分類によると、道教の施設であり、道士によって管理されている。1984年に県級重点文物保護スポットに指定された。

文昌宮は図書館の隣に位置し、学問の神さま、文昌帝を祭るところであり、清朝の道光時代に建てられた。文昌は文星、または文曲星ともよばれ、もともと星辰の神であったが、のちに人格化され、官職と俸給を司る神さまとして漢族によって崇拜されるようになった。したがって、教育や学問を重んじることはよく文昌宮が見られる。「学問の神さまを祭る文昌宮を建てるということは、和順郷の経済的実力と、教育や学問を重んじる盛ん風潮を象徴している」（董2000：34-37）。和順郷の文昌宮は文昌帝以外に、朱衣使者と魁星も奉っている。

和順図書館は華僑の故郷のシンボルであるのに対して、文昌宮は和順郷の教育と文化活動の中心である。20世紀の初期から、境内の一部は「義学」、「兩等学堂」、「益群中学校」などの学校の校舎として使われたり、村人による演劇の舞台として使われたりしていた。文化大革命のころ、文昌宮が壊れていたが、1999年に文昌宮は観光開発の資源として雲南省政府に認められ、政府の資金によって修繕された。現在、文昌宮は再び和順郷の文化的中心としての役割を果たすようになり、そこで和順郷の伝統的な音楽団体である洞経会が洞経を演奏したり、村人たちが写真展や切手コレクションなどの展示会を開催したりしている。

上記の四つの壇廟からは、和順郷の信仰体系が純粋な儒教的でもなければ、また純粋な仏教と道教のものでもない重層的信仰——シンクレティズムの特徴がうかがえる。これは漢族の民間信仰の特徴であり、すでに多くの学者によって指摘されている。一方、上記の五つの壇廟で奉られている神さまを見てみると、読書、学問、商業という現世の目標への執着が見られる。この信仰上の特徴は和順郷の人々の「^{イーシャンイールー}亦商亦儒」のライフスタイルと一致している。すなわち、和順郷の人々は商売に従事しながら、学問にも携わることを理想的なライフスタイルとしてきた。「明末から清初までの500年のあいだに挙人8名、拔貢3名と秀才403名の科挙合格者を輩出した」（李光信、李継東1999：59）。そのうちの清末民初に、和順郷から日本へ留学した学生は10人もいた。「亦商亦儒」はいまでも和順郷の人々が理想としているライフスタイルである。

3.3 祖廟とその歴史

現在、和順郷は建築の年代順に寸氏宗祠（1808年）、李氏宗祠（1820年代）、劉氏宗祠（1853年）張氏宗祠（1892年）と楊氏宗祠（1925年）など合計八つの祖廟がある。それぞれの祖廟には自分達の一族の歴史と家訓が刻まれ、先祖からのメッセージが次の世代に伝えられている。また、毎年、清明節の際に宗族単位の祖先祭祀の儀式が祖廟で行われ、一族の結束が再確認されている。

3.3.1 一番古い寸氏宗祠と威厳に満ちる李氏宗祠

寸氏宗祠は和順郷の八つの祖廟のなかで一番古い祖廟であり、しかも中国と西洋を折衷した建築様式である。寸氏一族のメンバーの一人で、ミャンマーで翡翠の商売で成功した寸海亭氏が1898年に和順郷の初めての女子校——和順明德女子学校を、この祖廟の中で創設して女性の啓蒙教育につとめた。現在、この祖廟は清明節の際に祖先祭祀が行われるが、普段は和順郷の幼稚園として使われている。

李氏宗祠に入ると、目の前に十数階の階段が現れ、階段の向こうに李氏一族の栄光の歴史を伝える、金粉入りの彫刻の対聯と扁額が掛けられており、威厳に満ちている。騰衝県志によれば、和順郷の李氏始祖は四川の李波という人であり、明の洪武時代（1368-1644年）に軍職で騰衝にやってきた。現在、和順郷にいる李波の子孫は主に十字路と水碓の二つの村に集中しているという（騰衝県志編纂委員会1995：977-978）。1985年に海外華僑の李氏と地元の李氏一族の寄付金で李氏宗祠は再び修繕され、祖先祭祀の場として使用されている。

3.3.2 張氏宗祠と科挙の栄光の証しである「華表」^{フアービャオ}

張氏宗祠は和順郷の八つの祖廟の中で一番建築規模の大きいものである（写真10）。和順郷の他の宗族の祖廟と同じように、1949年以降、張氏宗祠も騰衝県糧食局によって政府の倉庫として使われていた。また文化大革命のころ、人民公社の牛小屋に使われていた。現在、修繕された張氏宗祠はいたる所に歴史上有名な自筆の対聯、扁額、彫刻が飾られ、これらを目にする人々に年月の流れを感じさせ、その一族の栄光を物語っている。1999年に一族の運営を管理する張氏理事会が成立した。理事長に選ばれた人は張氏一族のメンバーであり、長年和順郷以外の政府の病院でつとめていて、近年定年したばかりの医者張希達である。張希達理事長の話によると、昔張氏宗祠の前には二本の華表^{フアービャオ}——装飾用の大きな石柱があった。「華表」は1.5丈（約5メートル）の高さがあり、その上にポケットがついていた。二本の「華表」は、張氏一族から二人の挙人が出たことを意味する。その一人目は清朝の咸豊時代に挙人になった人であり、二人目は清朝末期に挙人になった理事長の父のことであった。現在、「華表」そのものはなくなったが、科挙の栄光に輝いた一族の努力の物語は口頭伝承の形になって、観光客や張氏一族の若い世代で伝えら

れている。

また祖先祭祀に関しては、他の宗族と同じように年に一回行われ、女性の参加が可能となっている。祖先祭祀などの費用を捻出するために、理事長は宗祠を結婚の式場としてレンタルして使用料をとることも考案した。2001年に、張氏一族出身の若者がこの張氏宗祠の中で初めての結婚式を行った。結婚式場として張氏宗祠を利用した若者は、宗祠で結婚式を行うのは自宅で行うより場所が広くて、一部準備の手間を省くことができただけでなく、先祖のまえで式を挙げたのが神聖な感じがしてよかったと筆者に語った。

3.3.3 劉氏宗祠と劉氏宗族の祖先祭祀の変化

劉氏宗祠も上記の祖廟と同じように文化大革命のころ、人民公社の牛小屋として使われていたが、改革開放後、ミャンマー在住の劉氏一族のメンバーである劉富貴の12万円の寄附で立派に修繕されている。劉氏一族の人々によると、かつて劉氏宗祠の入り口には、一対の約3.3メートル高さの「華表」が建てられていたそうである。「華表」とは装飾用の大きな石柱のことであり、挙人の出た一族だけがそれを建てることが許されたという。「華表」のような石のモニュメントは内部に対して科挙試験で挙人の称号を獲得した人を表彰し、外部に対してそれを知らせるために建てられたものである。

劉氏の族譜、墓と県志によれば、和順郷劉氏の始祖は明朝の洪武時代に軍職で四川から騰衝に来た四川の劉継宗という人である（騰衝県志編纂委員会1995：975）。現在、劉氏一族を管理しているのは9人から構成された理事会である。理事長（1949年までの族長に相当）に選ばれた人は共産党員であり、1990年代に和順郷の郷長につとめた劉宗望である。

劉氏一族の年中行事とその変化について現役の劉氏一族の理事長である劉宗望にインタビューした。理事長は次のように説明した。「解放前に劉氏一族は和順郷の他の宗族と同じように年に二回、清明節と立冬のとき、祖先祭祀を行っていた。現在は、年に一回、清明節のときだけ。立冬はとても忙しい季節だから。祖先祭祀の際、招待状を出さないにもかかわらず、劉氏の人はその前日に他の郷、県からはるばるとやってきて、自分達の親戚の家か宗祠のなかに宿泊する」。祖先祭祀の会費として、劉氏一族の人々は一人当たり10元の現金と米1升を出している。その際、海外の華僑も寄附している。清明節の祖先祭祀の儀式は丸一日かかる。その間、劉氏一族の人々は祖廟の中で里芋などを素材とする鍋料理である「土鍋子」を朝夕に二回みんなで一緒に食べる。

劉理事長の妻も女性の視点から筆者に近年の祖先祭祀の変化を語ってくれた。「和順郷周辺では計画出産の政策が実施されてからいくつかの古い慣習が変わり始めた。まず、女性も清明節に行われる宗族の祖先祭祀の儀式に参加できるようになった。いま、祖先に向かって額を地につけて拝礼する場合、女性も男性も一緒に世代順に並んでいるのよ。

昔われわれの劉氏一族の中で一番上の世代に当たった劉錦朝がいつも最前の列に立っていた。彼が死んだ後、今彼の未亡人が一人で一番前の列に立っている。これは前代未聞のことだ。数年前までは、私のような劉氏一族の嫁たちは劉氏の祖先祭祀に参加することが許されなかった。私たち女性はただ、野次馬のように傍で男達による儀式をながめていた。現在、私は夫と一緒に同じ列に並んで、劉氏一族の祖先祭祀に参加している。これは計画出産の政策によって、少子化の現象が出てきたからである。女性の参加を自由にさせた方が参加者の人数も会費も増えるだろう」。

劉理事長とその妻の話によると、近年、祖先祭祀への女性参加が可能となったばかりではなく、族譜への女性のフルネームの記入も可能となったそうである。漢族の従来の慣習では、族譜は既婚女性の苗字だけが夫の一族の族譜に記入されていたが、現在、既婚女性の個人名も未婚女性のフルネームも記入できるようになっている。上述したことから人口政策が祖先祭祀及び宗族の族譜の記録、宗族のメンバーシップにインパクトを与えたことが伺われる。ここで人口政策と漢族の伝統的父系原理への影響を今後の研究課題として指摘しておきたい。

4 おわりに——まとめと展望

以上、雲南省国境地域である騰衝県和順郷での現地調査と文献調査に基づいて、民居、図書館、壇廟、祖廟といった建築に焦点を当てて、その建築様式、装飾、歴史およびその機能を見てきた。まとめてみれば、次の3点のことが言える。

まず、漢族の人口が94%を占めている和順郷の建築とその様式は、和順郷の歴史、宇宙観、社会秩序、人間関係と宗教信仰を表わす重要な媒介であると同時に、漢文化を主体とし、他の民族の文化および西洋文化の要素を吸収した多元性のある国境地域の文化様相を呈している。その漢文化の中で、現世を重んじ、読書しながらビジネスをするという積極的な出世態度をとり、祖先祭祀、上下の倫理と尊卑の等級を用いて人間社会を規制するという儒教的な礼の精神が支配的といえる。

第二に、この多元的文化様相をもたらす原因は主に三つあると考えられる。(1) 歴史的にここはタイ、回、リス、ワ、アチャン、白族と漢族が雑居する地域であり、衣食住、言葉、生産様式などにおいてお互いに影響しあってきた。白族の伝統的建築様式といわれている「三坊一照壁」「四合五天井」がこの建築の主要パターンとなっているのはよい例である。(2) また、明代以降に四川、湖南、南京などの地域から多くの漢族移民が雲南に移入してきた。このような大量の人口移動とともに漢文化の要素もこの地域に持ち込まれた。明代以降の和順郷には学問の神さまを奉る壇廟、父系原理の遵守と一族の結束を趣旨とする祖先祭祀を行う場である祖廟の出現はその例である。白族の「三坊一照壁」と「四合五天井」という建築様式が形成されたのも漢族文化を摂取し、漢族の四合

院の影響を受けながら、雲南の風土に合わせて自民族の美意識を取り入れた結果である。

(3) 国境地域という地政学的な特徴がこの地域の建築様式、地域文化および人々の運命に与えた影響も少なくない。王朝時代と1948年までのイギリスの植民地時代に、和順郷の人々は比較的自由にミャンマーへ渡り、ミャンマー、タイ、インドなどで働いていた。海外でビジネスを成功し、見聞を広げた彼らは、故郷に送金すると同時に情報もアイデアも持ち込んでいた。たとえば、図書館の建設、中国と西洋を折衷した図書館の建築様式、西洋的なカリキュラムを取り入れた男女共学の学校や女子校の建設はその例である。

第三に、中国の他の地域と比べて、華僑の故郷の和順郷では、封建的な制度の象徴とされた祖廟、住宅の彫刻、門楼、扁額、対聯などが土地改革、人民公社、特に文化大革命の時代にあまり破壊されずに比較的よい状態で保存されているという点である。よい状態で保存されている理由は土地改革のときに中央政府が華僑の故郷の和順郷に対して「平和土改」という特別の優遇政策をとったところにある。一般の農村において地主の土地が取り上げられ、その住宅、現金、衣服なども没収され、地主本人がつるし上げにあつたのに対して、和順郷では華僑および僑眷の地主は土地の契約書だけを政府に提出させられ、つるし上げにあつてもなく、現金と住宅も取り上げられることはなかった。祖廟は23で述べたように、政府の倉庫と牛小屋として使われていたため、破損は少し生じたが、あまり大きく破壊されずに済んだ。改革開放後に、華僑たちの寄附金で祖廟は修繕され、再び一族の結束を図り、祖先祭祀を行う場として使われている。

近年、豪華で洗練されており、なお且つ保存状態もよい和順郷の民居はその歴史的・芸術的価値が高く評価され、観光資源としての重要性も雲南省政府や地元の政府によって認められている。そのため、雲南省政府と騰衝県政府が主導で「雲南の最大の華僑の故郷」、「中国郷鎮のナンバーワンの図書館」、「山茶水明の桃源郷」、「中原文化の縮図」、「翡翠の家」などのキャッチフレーズで和順郷の観光開発を始めた。「和順郷の観光の文脈にみられる地域文化の表象は文字通りの国境地域の文化と、中原を発祥の地とし、儒教を核心とする中華の正当文化を継承した文化の両側面が見られる。従来社会主義イデオロギー基準で否定されてきた古い様式の建築と家具、祖先崇拜、祖廟、壇廟、洞経会は政府の呼びかけた『観光立省』と文化生態村の建設というコンテキストのなかで、観光資源という新たな尺度で測られ、地域文化というカテゴリーに入れられ再評価されている」(韓2005:393)。和順郷政府の統計によると、1996年に和順郷を訪れた観光客の人数は約15万人、1999年に約36万人、2000年に約53.45万人という数字に達している。これだけの観光客を毎年迎えている和順郷の人々は、自分たちの日常生活、居住様式、自分たちの歴史をどのように整理して、そのように他者にディスプレイするのか、他者の目を意識する和順郷の人々のアイデンティティ、歴史認識と文化表象が今後どのように変わっていくのかは注目していく必要がある。

注

- 1 元の石碑の一部はすでに壊され、頭の部分がまだ残っている。現在の石碑は村人が近年に立て直したものである。
- 2 1991年1月1日から施行し始めた「中華人民共和国帰僑僑眷權益保護法」によると、僑眷とは、中国に住んでいる、華僑及び中国に戻っている華僑たちの親族を指す。その範囲は華僑の配偶者、両親、子女及び彼らの配偶者、兄弟姉妹、祖父母、孫、及び華僑と長いあいだに扶養関係に結ばれた他の親戚までを含む。
- 3 李根源(1879-1965年)は雲南省騰衝県生れ。清王朝の打倒を主旨とする同盟会の会員であり、また雲南の辛亥革命を指導した將軍でもある。
- 4 和順郷では、昔も今も、40歳過ぎたら、精進齋を始める女性が多い。精進は彼女達にとって願掛けの手段である。ただし、毎日、精進を行っている人は少ない。普通、月2回、旧暦の一日と十五日に行う人が最も多い。このような月二回精進を行うことは「花齋」という。
- 5 動労者によって構成され、ある地域や機関に派遣され、そこを調査したり、その仕事を指導したりする、あるいはそこの仕事に参加する臨時組織である。毛沢東の時代には、このような臨時組織は農村や学校によく派遣されていた。労働者構成の宣伝隊のほかに、幹部や解放軍構成の宣伝隊もあった。
- 6 1996年に騰衝県政府によって設立された県文物管理所は県内にある歴史の文物を鑑定したり、管理したり保護したりするのが仕事である。

文献

石毛直道

1971『居住空間の人類学』東京：鹿島出版会。

尹紹亭, 李正等

1999『雲南民族文化生態村建設項目前期成果報告』昆明：雲南民族文化生態村建設項目組。

韓 敏

2005「地域文化の表象と再構築——雲南省騰衝県和順郷の事例に基づいて」『中国の民族表象——南部諸地域の人類学・歴史学的研究』pp.365-398 長谷川清・塚田誠之編 東京：風響社。

田中淡

1985「中国建築」『平凡社大百科事典』第8巻 東京：平凡社。

董平

2000『雲南著名僑郷——和順風雨六百年』昆明：雲南人民出版社。

騰衝県志編纂委員会

1995『騰衝県志』北京：中華書局出版。

ナップ・ロナルド著, 西村幸夫監修 菅原博貢訳

1996『中国の住まい』京都：学芸出版社。

葉大兵, 烏丙安

1990『中国風俗辞典』上海：上海辞書出版社。

楊大禹

1997『雲南少数民族住居——形式与文化研究』天津：天津大学出版社。

横山廣子

2001 「国家政策の変遷とペー族農村社会」『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』国立民族学博物館調査報告 20 横山廣子編 大阪：国立民族学博物館。

李光信, 李繼東

1999 「弘揚僑郷文化, 継承愛国愛郷の優良伝統」『和順郷』騰衝：『和順郷』編委会出版。

李玉祥, 陳謀徳, 王翠蘭

2000 『老房子——雲南民居』南京：江蘇人民出版社。

渡邊欣雄

2001 『風水の社会人類学——中国とその周辺比較』東京：風響社。



写真1 門楼入り口の表門の上に建てた高いアーチ



写真2 「福」の字が書かれた照壁



写真3 71年も和順郷に在住した白族の木工、劉錫錫氏（右）と騰衝県文物管理所長の李正氏



写真4 「天地君親師」、「竈の神」と「一族の歴代先祖」の位牌が祀られている母屋の祭壇



写真5 結婚式を行う際に貼るめでたい対句の対聯と匾額



写真6 1940年代後半に李氏一族が母屋の前で撮った集合写真

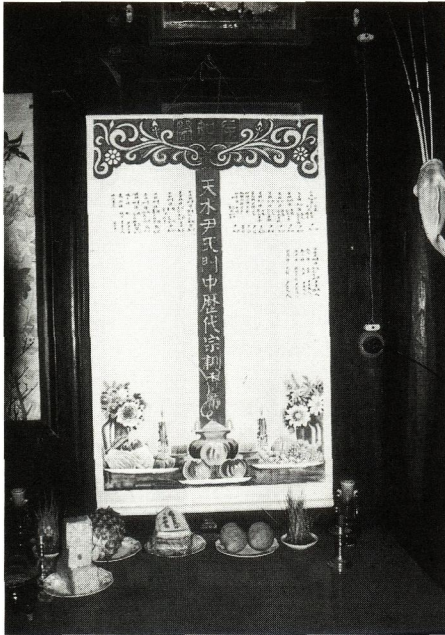


写真7 中元節の間に母屋で一族の死者の名簿を掛け、供え物を供える。



写真8 和順郷の田園風景



写真9 和順図書館



写真10 張氏宗祠

